

Title	回想：社会学研究科心理学専攻発足
Sub Title	Remembrance : The starting of the faculty of psychology in the graduate school
Author	小川, 隆(Ogawa, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1993
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.36 (1993.) ,p.5- 6
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	30周年記念号
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000036-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

回想：社会学研究科心理学専攻発足

Remembrance: The Starting of the Faculty of Psychology in the Graduate School

小 川 隆*

Takashi Ogawa

慶應義塾大学に新制の大学院として社会学研究科修士課程が設立されたのは1951年4月であったが、続いて1953年4月に博士課程が増設された。その中で心理学は社会学と並んで専攻部門となった。私は1950年4月から塾文学部の心理学の専門課程を御手伝いすることになり、さらに大学院の授業も担当することとなった。

1961年4月からは教育学専攻が開設されることになり、社会学研究科は社会学、心理学、教育学の三専攻を包括するものとなった。

学部の心理学は当時、文学部哲学専攻の中にあつたが、大学院文学研究科の中に包含しなかつたのは定かな理由は解らないが、その頃、社会学、心理学、教育学などを人間関係部門 (Division of Human Relations) という名称で一括する機運があつたからかと思われる。それにしても社会学というだけでは狭義に過ぎるので、人間関係学、人間科学、行動科学などの何れかの名称とした方がよいという意見もあつたようであるが、それらの名称も何か当時ではなじまないこともあつて適当な名称もなく社会学研究科ということになっていた。その後、学部の専攻では社会学、心理学、教育学が1963年、哲学専攻から独立し並立した一学科を構成することになり、この方は各専攻名を並べて社会、心理、教育学科と呼ぶことになったが**、大学院は現在でも社会学研究科と呼んでいる。それで、そう呼びながらその内容は人間関係学科と呼ばれるのに適わしいが、しかし、学部の人間関係学科は文学部の教員からのみ構成されているが大学院の社会学研究科は当初から今日まで一学部ではなく、数学部の教授陣によって構成され、院生も諸学部の

卒業生であつて、これが他の諸研究科と違った特色をなしている。

塾に心理学研究室を開設された横山松三郎教授はながく米国で実験心理学を研鑽された方で実験心理学を基本にしたカリキュラムが学部同様大学院でも踏襲されていた。私も実験心理学の講義・演習を担当したが、その中に新たに比較心理学の領域を加えることにした。内容はハーバード大学のスキナー教授が開拓された実験的行動分析の手法を用いた研究である。米国の動物実験の伝統ではネズミを被験体とするものが主流であつたが、教授はデンショバトを用いた所謂、スキナー・ボックスを新に考案され斬新な研究を進めていられた。旧図書館横に小やかな実験室を建て教授から送って戴いたスキナー・ボックスを置き実験研究を開始したがこの研究は日本でははじめてのことであり、当時の新聞にも報道されたほどであつた。院生の中にこれに参加する人達が居り、毎年、途だえることなく今日に及んでいる。佐藤方哉教授、渡辺 茂教授、坂上貴之助教授が塾内にあつて現在も活発な研究指導を続けていられる。実験室も何度か改築されて行つたが現在は綱町に移転、さらに立派になっている。私の定年2年前、(1979)に第43回日本心理学会を塾で開催することになり、スキナー教授を招き名誉学位を贈ることもできた。塾で催された記念講演は“Non punitive society”という表題であつたが文字通り満員の盛況であつた。

大学院の実験心理学として特色ある講義は林銈蔵教授(現名誉教授)の実験装置研究、印東太郎教授(現カリフォルニア大教授)の行動数理研究であつた。実験装置に関わる具体的操作を知ること、また、単なる統計学ではなく心理学に即した資料の数理解析を行うことは行動科

* 慶應義塾大学名誉教授

** 現在は人間関係学科となっている。

学、認知科学として成長している近來の実験心理学にとって現代の実学の精神を示したものといえよう。

実験心理学に並んで佐原六郎教授が社会心理学、西谷謙堂教授が発達心理学を担当されたが、この他、講師として大脳生理学を林焯教授、精神医学を塩入円裕助教授が医学部から兼任された。横山教授は実験心理学を基本にした応用心理学にも力を入れて居られたので桐原保見博士（当時労働科学研究所長）が兼任として迎えられ、精神動作研究を講義された。後には大脳生理学は神経生理学と改名、塚田裕三教授（現名誉教授）に精神医学は小此木啓吾教授に、精神動作研究は金子秀彬教授（現常磐大学教授）、大田垣瑞一郎教授にそれぞれ継承された。

社会学研究科では設立時から研究発表や学事報告の機関誌の発刊を念願していたがいろいろな事情のためその実現が遅れていた。当初は院生の数も少く、研究科委員もそれぞれの学部の紀要に投稿していたこともあって、

そのままに過ぎていたが、院生数も増加し研究発表の機会をふやすこと、また、研究科の学事報告の必要も深まったことから漸く設立 10 年後（1962）社会学研究科紀要が発刊されることになった。表紙には慶應義塾大学院社会学研究科紀要のタイトルの下に社会学、心理学、教育学の名称が並記された。第 1 号には有賀喜左衛門教授らの諏訪市湖南南真志野村落に関する調査報告、三田演説館で行われたジョージ・バランディエ博士の講演要旨と並んで心理学からは大日向達子助手（現日本女子大学教授）佐藤方哉助手（現塾文学部教授）小谷津孝明助手（現塾文学部教授）の論文が巻頭に掲載されている。以来、心理学では院生の修士論文、博士論文の一部を構成する諸研究を含めて若い人達の研究を主とし数篇の論文が毎号掲載されているが、これらを通覧すると何れも力作であり今日までの学会の動向の縮図をみる思いである。